批評と紹介

E・G・プーリーブランク著
古代中国語の子音組織

河野六郎

著者のプーリーブランク氏は、ケインブリッヂ大学の、我我には馴染みの深い教授である。そのプーリーブランク教授が、この頃では歴史学から言語学へ転向した様に見える。今ここに紹介する大論文もそうであるが、この外に次の数篇も同じ傾向の様に見受けられる。

"A Case of Sandhi," (Asia Major, New Series, Vol. VI, pp. 200—202)

"Studies in Early Chinese Grammar," Part I, (Asia Major, New Series, Vol. VIII, pp. 36—67)

"An Interpretation of the Vowel Systems of Old Chinese and of Written Burmese, (Asia Major, New Series, Vol. X, pp. 200—221)

"Fei, Wei and Certain Related Words," (Studia serica Bernhard Karlgren dedicata, pp. 178—189)

しかし、プーリーブランク教授はやはり言語学者ではなく、歴史学者である。それは、本論文の題名にも拘らず、この論文の主要な狙いは、中国語の古音の再建などではなく、著者がAppendixに収めた「匈奴の言語」にあるからである。そしてその匈奴の言語がイェニセイ・オスチャーク語群の一派であるという新説が打ち出されている。従来、その系統帰属に問題のあつたこのイェニセイ・オスチャーク語に、もし匈奴語が関係があつたということが科学的に論証されるならば、甲論乙駁の匈奴民族の問題に大いなる光明を投げかけるであろう。しかし、なにしろ五つの物名と四つの官名だけで、しかも調査の行きとどいていないイェニセイ・オスチャーク語との引きあてでは、プーリーブランク氏といえども我我を首肯せしめるに足りる論証がなされているとは残念ながら言えない。それはともかく、本音が二十七頁のAppendixにあり、その論拠として百二十頁も古代中国語の子音組織が極めて大胆に述べられているという、一寸風変りな論文である。そしてその論述は言語学者には見られない勇敢なものである。しかし、その勇敢さに敬意を表して、いささか所見を述べさせて貰うことにする。

プーリーブランク先生は勉強家である。前半巻頭に三頁半、後半巻頭に五頁の参考文献が掲げられているところから

も、それをまたよく読んで居られるところからも、その勉強振りが察せられる。その文献の中には評者の小論なども入つているくらいで、恐れ入つた次第である。それはとにかく、中国音韻学を専攻にしている者でさえ中々すべての文献に眼を通すことが困難であるのに、単にそれを読破するだけでなく、それを先生一流に纒め上げている力量は感服する外は無い。よほど音韻学を勉強されたにちがいない。六五—八五頁の「切韻の体系」の章は従来の説を要領よく纒めたもので、これだけでも一読の価値がある。但し、母音aを含む二等重韻の一方にaaの二重母音を考えるのは論証不十分である(p. 76)。その論拠に朝鮮字音を持つて来ているが、これは見当違いである。又宕摂と梗摂の差違については、頼惟勤氏の有名な論文「上古中国語の喉頭韻尾について」(お茶の水女子大学人文科学紀要第三巻所載、昭和二八年六月)を見ていないので無理もないが、これはやはり韻尾ngの二種類を考えれば難無く解決する、等々の点で問題は無くはないが、ともかく、この論文の中ではここが最も読みがいがある。

さて、この論文の、量的に最も多くを占めるのは標題の古代中国語の子音組織についてである。もつとも、この「古代中国語」、英語ではOld Chineseというのは、この訳語では、恐らく同じ訳語になるかもしれないところの、カルルグレン先生のAncient Chinese(日本では中古音と訳す)とは区別した名称で、著者のいうところによれば、そのOld Chineseとは漢代を中心とするものらしい(p. 65)。しかし、その漢代が最もくせものなのである。漢代は、中国音韻史の展開の上で興味ある段階の一つであると思われるにも拘らず、事実においては、我々の依拠するに足りる体系が一つも無いのである。従つて、以前、Serruys教授がその間隙に「説文」の体系を持つて来ようと試みられたことがあるが、それは当然巧く行かなかつた(拙評 ポール・セリュイス著『方言』に依る漢代のシナ語方言」、東洋学報第四三巻第三号(八六〜九一頁)所載、一九六〇年一二月)。しよせん、漢代は、いわゆる「上古音」(Archaic Chinese)から切韻の代表する「中古音」への通過駅に過ぎないのである。その漢代の子音組織を考えようとする、その意気は正に壮とするに足りる。しかし、残念ながら、事志に叶つているとは思われない。我々ならば、というのは言語学者ならば、この魅力あるテーマに対して、それが魅力があるだけに一層慎重を期するであろう。という意味は、著者がよつて以て根拠としている様な、外国語音の、外国語音に依るtranscriptionなどは、音韻史料としてはまず三流の価値しかないということくらいは心得ている筈だからである。流石に、カルルグレン大先生はそんな真似はしなかつた。カルルグレン先生はその名著‘Études sur la phonologie chinoise’の巻頭において次

の如く言つている。

「これらの資料の中、第一のもの〔評者注、外国語における中国語の転写及び外国語の漢字転写〕の研究は、将来、非常に興味のある結果をもたらすにちがいない。しかし、この材料を過信してはならない。どこでも、借用された外国語を自分の言語の『調音基礎』(base d'articulation) に適応させるため、判らなくなるくらいに歪めてしまう傾向があるので、近似的にしろ精確なことを求めることはできない」(p. 23)。又「転写の、非常に重要な役割は、とりわけ、その国の材料によつて得られた結果の試金石であることであろう」(p. 24)。

プーリーブランク教授は、カルルグレン先生のいう転写の将来性を大いに活用したわけであろうが、ほかに然るべき材料も無いのに転写だけに頼るのは少々心細い。

いまここで、その批評を一々試みることは到底出来ないから、問題になる二三の点について感想を述べることにする。その一つは、いわゆる「重紐」に関する問題である。この「重紐」の区別が介母音の i̯ と ï̯ の区別であるとしたのは故有坂秀世博士であり、評者もその驥尾に附したことがあつた。又中国でも王静如、陸志韋の様な人々が我々とは独立に考えた。プーリーブランク教授もこの区別を重要視したが (p. 70)、問題はその起源である。プ教授によると (p. 99)、この二種の介母音は元来からのものではなく、古代中国語から中期中国語（切韻音）までの間に発生したもので、長い主要母音から発生したものであるという。その「直接の証拠はなかなか見出せない」が、例えば、カラシャルの土名 *Ärgi に対する焉耆 M. i̯an（又は i̯en-gïr̩ トカラ語Bの ankwaṣ に対する央賈 M. i̯ag-gi̯wi̯（別に又阿魏 ʼa-gi̯wai̯）、またサンスクリットの u に対し憂・優 M. i̯u を転写に用いているなどの例があげられている。そして主要母音から介母音を析出した事実として、切韻以後における四等韻の ei, en, eg 等が yei, yen, yeg 等に合流したことや、更に二等韻の母音 a が ya となつた例などはその延長であるという (p. 90)。この着想はたしかに面白い。焉や央の様な拗音形が外国語音の a を写したことはたしかに説明を要する所であるが、その根拠が外国語音の断片的な転写に基づくだけではいささか頼りない。というのは、前にも指摘したように、比較される外国語音そのものの性格がはつきりしない以上、それを論拠として中国語音の広汎な範囲にわたる問題を料理することは勇敢に過ぎる。そしてそれが母音の長短というようなことで解決されるのは一層危険である。カルルグレン氏も二等重韻の区別に窮して、母音の長短を逃げ道としたことがあるけれども、中国語の音節構造で、母音の量の差別を持ちこむことは、もちろん可能であろうが、よほど確たる証拠でもないかぎり、

我々を納得させるに十分ではない。

中国語上古音に複頭子音のあつたことはカルルグレン教授の指摘したところであるが、それは専ら形声文字とその声符になる文字との関係から推定されるものである。プーリーブランク教授もこれを大々的に活用した結果、彼のいわゆる Old Chinese では夥しい複頭子音があつたことになつた。たとえば、邪には źia と ya の二音があるが、これは、教授によれば、*sgˀ-及び*gˀ-からの発展であるという(p. 130)。そして、詳しい論述は省略するが、*sgˀ- の証明に、「釈名」に語 ǰio˘ を叙 źio˘ で説明していることを、Bodman ("A Linguistc Study of the Shih Ming", Harvard-Yenching Institute Studies XI, p. 61) の説によつて引合いに出している。衆知のごとく、「釈名」は音の類似によつて語を説明しようと試みた、面白い著作である。しかし、「釈名」の説明に用いられる説明語と被説明語の音韻の関係は大部分の場合、近似的なものでしかない。従つて、「釈名」を根拠に論証するのは滑稽である。プーリーブランク教授が上の論証に、一人称代名詞の余 yo を吾 ǰou と cognate であるかもしれないと言つているのは更に大胆な想像である。

カルルグレン先生はこの複頭子音の問題ではかなり慎重で、極めて多くの例によつて支えられている場合以外は、控え目であつた。プーリーブランク氏になると、かつての Boodberg 氏と同じく、あらゆる可能性を悉く利用して複頭子音を作り上げる。たとえば、律・筆の聿声の文字、戀・變・蠻などの䜌声の文字、或いは臨と品の関係などより、*pl-・*phl-・*bl-を想定するのはカルルグレン氏以来のことでまだよいとして、竜liǫg は「雑也」の意で maug となるところから、liǫg は *vlōg から、maug は*vlog から発展したとする(p. 137)。そしてその着想にはチベット語 ḫbrug が支持を与えている。同様にして、犛は、mau・lǝi・liə の三音があることからこれも複頭子音*vl-を考える。ここでもチベット語の ḫbri-mo「牝の犛」が参照されている。又理 liə に対する埋 maǝi の例もあり、これもチベット語 ḫbri-ba "draw, design" が引合いに出されている (p. 137—138)。これらはシナ・チベット語比較の音韻対応の材料としては一寸魅惑的であるが、どうやらチベット語との対応に引きずられて考え出した様に見える。

竜の場合でも、犛の場合でも、同じ文字が二つ又は三つの音を持つているわけであるから、その理由を共通の祖形に持つて行こうというのであるが、一般に、漢字は後世では段々一字一語の原則が確立されるようになつたとしても、上古においては同じ文字が同じ語を表わさなければならないという必然性は無かつた。金石文によく現れる〈立〉の字は殆ど常に後世の〔位〕に当るものであつて、〔立ツ〕ではない。仮に

〔立ツ〕を表わしたとしても、この文字は、同じ文字が二つの、意味は相関連しながら、全く別の語を表わし得たのである。同じ事が〈令〉の字についても言える。金石文では多くの場合、〔命〕を表わしているが、この文字は〔命〕と〔令〕の二語を表わしたのである。従つて、音の上で、〔位〕と〔立〕、〔命〕と〔令〕を無理に結びつけることはできないのである。葬に三音あるのは、同じ意味の、三つの別々の語がたまたま同じ文字で表わしたのが採録されているにすぎない。

著者は *vl- の仮設を更に推し進める。夔 tsuŋ は凶 hiɔŋ を声符とする。ところで、凶声の文字は、直音 uŋ の前では ts-、拗音の前では h- となるとし、そこから、ts は h の直音に当り、*f-〉M. *ts'fi〉M. hi を再建する。ここに唇音 f が出て来るのは、一方、鑁には miɑm という、頭音に唇音 m- の音があつて、ts- が唇音と交替することには葬 M. tsɑŋ'：莽 M. mɑŋ'（説文によると、莫 *mak はこれと同じ声符を持つ、なお、墓 M. mou' 参照）の例があるから、ts と m とを繋ぐものとして f を考えるのである。著者の意を忖度すると、葬と莽とは cognate と解しているらしい。そして、*f-〉ts の変化は一寸考えられるように驚くべきことではないとして、あまりもつともらしくない説明が施されている（以上 p. 138—139）。更にこの関係を凶声にまで及ぼし、匈 hiɔŋ "breast" が、Simon 氏の説に従つて、チベット語の brañ に結びつけられることに注目し、匈は f- よりも fɹ- とすべきであるという。そしてこの結論から、匈奴 M. hiɔŋ-nou は *fɔŋ-naɦ からの転化であるとする。とすると、匈奴は Apollodorus の Φρῦνοι と等しくなる。この Φρῦνοι を匈奴に比定するのは Haloun の説で、"Die sachliche Identität ist m. E. unabweisbar." という Haloun の説を根拠に置く。プーリーブランク氏の胸中を察するに、どうやらこの議論の進め方とは逆らしい。すなわち、プ氏はまず Haloun の匈奴＝Φρῦνοι から出発し、これを何とかして音の上でも一致させようという魂胆から、匈＝Tib. brañ というサイモン氏の説を利用しつつ、逆に凶声の文字の原音を割り出して行つたらしい。

この様な議論は数多くの同様な論述のほんの一例であるが、いかに危い橋を渡つているかが判る。殊に、鑁の如き、極めて特殊な文字の、特殊な音を根拠に、ts- を f- から導き出すのは正に曲芸以外の何ものでもない。

大体、鑁 miɑm なる字音は、形声文字の通念からすれば、極めて異例な字音である。もちろん、こういう異例は古音の再建に貴重な材料になることも考えなければならないが、しかし、次の様な事も起り得るので、必ずしも安心できない。その最も典型的な例は、〈袂〉の字音 miäi' である。夬声からはいかにしても頭音 m- が出て来ない。プーリーブランク

式にすれば、*khm- などを想定できるかもしれない。しかし、これはそうではない。〈袂〉はもとk'wetか又はそれに類する音の袖を意味する語を表わしていたが、たまたま、それと同じ意味を示すmiäi'という語との生存闘争の結果、この文字をmiäi'に奪われたのである。あたかも、〈求〉はもと「皮衣」を意味する語を表わすために作られた文字であつたのに、[求メル]という語に奪われたのと同様である。そして、[皮衣]がやむなく別に〈裘〉という文字を得たのと同じく、k'wetも後に別の文字〈褊〉を作つた。この文字は「広雅」に見え、「切韻」ではk'wetである。形声文字は一種の表音文字ではあるが、一旦、固定すると、象形や指事の文字と同じことになる。つまり、形声文字はその成立に際しては半ば表音を媒介とするが、一旦定著すると、その表わすべき語と直接連合してしまい、表音の力は二の次になる。厳密にいえば、固定化した後でも、表音力は或る程度依然として保たれるが、しかし、音韻変化に絶えず対処するようにはならない。従つて、形声文字は特に古い音形を探る材料になることはある。しかし、一方で、一文字と一語との連合が固くなると、今度はその語と同義の語とも連合し得る可能性を持つようになる。〈袂〉の字がmiäi'と連合したのはその一例である。この様な可能性を考えると、形声文字は常にその声符の表わし得る音を表わすとは限らなくなる。従来、プーリーブランク氏に限らず、欧米では形声文字は常に表音的であるという考えが支配的であつて、その結果、声符は何でも彼でも表音価値を持つという前提が強かつた。この考えの裏には、欧米の学者の、アルファベットの様な表音文字しか文字でないという、牢固として抜き難い偏見が強力に根を張つているのである。ところが、上の袂字の様な場合も十分あり得るのであるから、形声文字の取扱いにも一々の場合を慎重に考えなければならない。

本論文には、中々面白い着想がここそこに散見する。その一々を取り上げられないのは残念であるが、前にも述べたように、プーリーブランク先生の再建したOld Chinesee の様相を結果から見ると、語頭にも語末にも多様な複子音が存在したことになる。プ教授のOld Chinseなるものが、もし漢代の言語であるとすると、それから「切韻」に至る、僅か五六百年に激しい変化が行われたことになるが、この様な急激な、且つ容貌を一変する様な変化が五六百年の間に行われたとは到底考えられない。しかも、その様な結論を導き出す根拠が、大部分の場合、片々たる、しかも各種各様の外国語の転写なのである。

(E.G. Pulleyblank, The Consonantal System of Old Chinese, *ASIA MAJOR*, New Series, Vol. IX, Part I, pp. 58-141; Part II, pp. 206-265)